

石狩低地帯の湿原

▲勇払原野▽

勇払原野は石狩低地帯の太平洋への開口部において、厚真から苫小牧にかけて発達した砂丘によって閉じられた古ウトナイ湖を中心て成立したものである。

この原野は、主として恵庭岳、樽前岳に由来する火山噴出物、ことに粗粒火山灰を広くかぶっている。樽前山の爆発はもつとも新しく、しかも数度にわたっており、各所に厚い堆積を見せている。

砂丘に由来する海浜植物と、砂丘間湿地や段丘末端部に伏流水によって生じた沼地を中心として成立した湿原植生、それに火山灰に成立した植生との混在とがこの原野の植生を特徴づけるものである。しかも夏季に多い海霧と冬季の真雪による高山的気候とが時に高山ないし寒地系植物をも生育せしめている。タルマイソウ(イワブクロ)や、ミヤマハナゴケなどはその例である。湿原としては美々川流域のものかもつとも大きい。この湿原はハンノキヨシ群集に代表される。いわゆる低層湿原の典型的

なものである。美々川のいくつかの支流に沿ってそれぞれ湿原が発達しており、スゲ型湿原(ムジナスゲ、ワタスゲなど)の発達が著しい。

勇払原野は植物の上だけでなく、湖沼や湿原を主な生息地、渡来地とする鳥類の豊富などとしても知られている。中でもウトナイ湖を中心とするハクチョウの渡来は有名で古くから観察、研究が行なわれている。またアサギのコロニーがある点でも名高い。

勇払原野は明治年間に苫小牧に製紙工場が立地するまではきわめて人口の少ないところだったし、その後も人口密度の高いつころではなかった。厚い火山灰層の存在と湿地の介在することとは農耕地としても居住地としても不利な条件であったから、広く耕地化されるようになったのも比較的近年にすぎない。

その耕地も大部分は段丘上に集中していて湿原の利用は著しくなかった。



いわゆる苫東計画によってウトナイ湖や美々川湿原を除くほとんど大部分が工業基地予定地に組みこまれた。緑地系として基地内の現存植生ができるだけ保存されることにはなっているが、自然生態系の大きな変革は免がれないだろう。十分なチェックと追跡調査が必要である。

▲新篠津▽

石狩低地帯の、ことに空知平野から石狩川の河口にかけて湿原がよく発達している。篠津、美唄、幌向、野幌(学田)などがそれである。植物学的には幌向が比較的

辻井達一

よく調査されているが、他の湿原はほとんど完全な調査のないままに排水、改良されて北海道の重要な穀倉地帯に変えられて行つた。

篠津はもつともおそくまで残されていたが、昭和二十年代から大規模に開発され、現在では新篠津村の一面にごく小さな部分を残すにすぎない。

▲野幌学田▽

野幌学田は野幌原始林の東側にあり、現在小さな沼と、数haぐらいの小面積を残すにすぎないが、いわゆる幌向泥炭地の類型に属するものとして貴重な例とされる。

▲生振湿原▽

生振湿原は石狩河口に近い蛇行部分であり、河川敷の一部の泥洲に発達したハンノキヨシ群集であるが、ことにミズバショウの大きな群落をもつ点で特徴づけられる。これは現在の北海道でもつとも大きいミズバショウ群落と考えられる。

(北大農学部附属植物園)